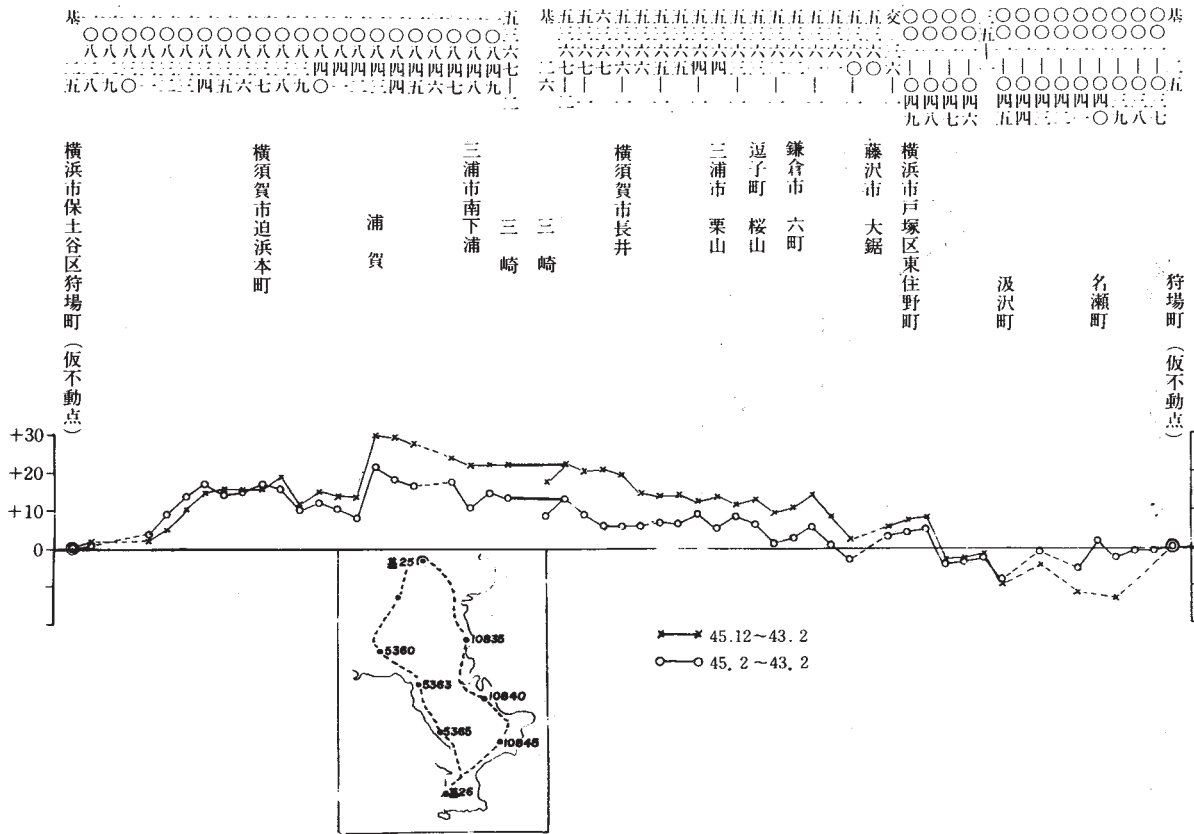


3-1 三浦半島の最近の上下変動

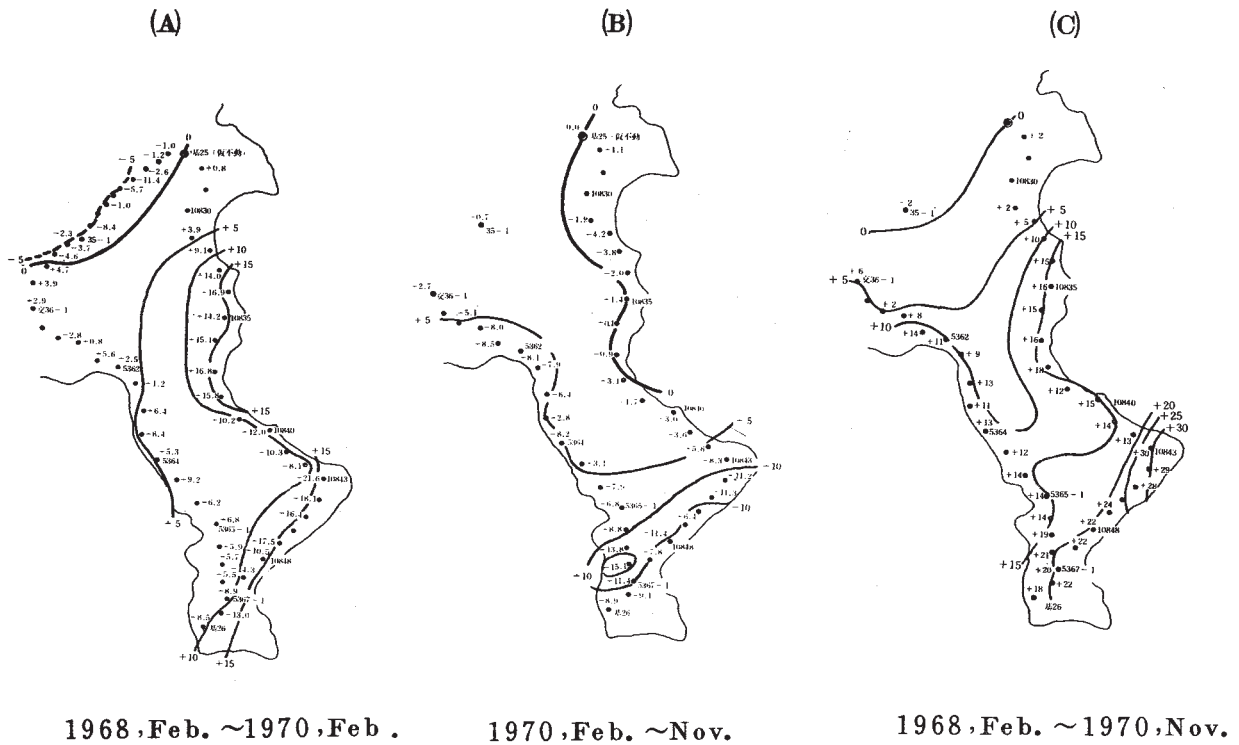
建設省国土地理院 地殻活動調査室

三浦半島の水準測量については、前回に1968年2月～1970年2月の期間中半島南部が北に対し隆起に転じたことを報告した（連絡会会報第3巻25頁）。今回はその後、関東地方測量部が関東南部で実施中の水準測量のうち、1970年11月に終了した三浦半島地域の成果を報告する。第1図は基25（横浜）を仮不動としたときの1968年2月～1970年2月と1968年2月～1970年11月の両期間における三浦半島を一周する変動プロファイルを示したもので、南部が時と共に隆起している様相が明らかである。この結果を面的に変動コンターで示したのが第2図で、(A)、(B)はそれぞれ1968年2月～1970年2月および1970年2月～11月の期間の変動をmm単位で示した。さらに(C)は(A)+(B)を示したものである。これから明らかな様に三浦半島は基25に対し、過去2年間に南東部が15mm隆起したのが、1970年の9ヶ月間にさらに10mm隆起していることになり、1968年2月から通算して+25～30mmという顕著な異常隆起が認められる。一方油壺の験潮記録を近隣の他の験潮場と比較して見たのが第3図である。験潮記録は海象、気象の影響が極めて大きいので、これらの雑音を小さくするため次の処置を行なった。先づ油壺と近隣験潮場の月平均潮位の差を求め、両験潮場に共通な海象、気象の影響を除去する。さらに、これを取り切れない年周変化の差の影響を取るため、半年の巾でランニング平均を求め、さらにその結果を1年の巾で2重にランニング平均を行ない1年以下の短周期雑音を除去した。第3図は上記の処理を、油壺－岡田（大島）、油壺－布良（房総南端）、油壺－伊東および油壺－内浦（駿河湾沼津近傍）について行なったものである。図は油壺の土地の上下変動を比較した験潮場を基準として表わす符号で書いた。上述したlow pass filterを通した後も数年程度の周期の雑音が2～3cmの振巾で残っている。特に1960～61年の大きな変動は太平洋沿岸に出現した大冷水塊の影響の地域差が相当量残っているためのものである。しかし、これらの短周期変動を無視して長期的な積年変化に注目すると、例えば内浦（水準測量で長期的に安定で上下変動の積年変化量が小さい）に相対的な油壺の変動は1960年ごろまでは約7mm/yearの速度で沈下して来たが、それ以後は沈下速度がにぶり、最近ではどちらかといえば隆起傾向に転じつつある様に見られる。内浦は平均海水面に対し、わずかの積年の隆起が認められるので、油壺が関東大地震以後の沈下傾向から最近隆起傾向に転じていることは水準測量のみでなく、験潮からも裏づけられているといえよう。

第1図 三浦半島一等水準測量變動図



第2図 昭和43年2月~昭和45年11月間變動量 (単位mm)



第3図 験潮による油壺験潮場の地殻上下変動（周辺験潮場との比較）。

